

## 特集 「色彩調和」

# ファッションの色彩調和

## Color Harmony in Fashion Color

大関 徹 Tooru Oozeki (社)日本流行色協会 Japan Fashion Color Association

### 色彩調和以前の調和

ファッションという用語の意味はいささか広いが、ここでは洋装での「(流行の) 衣服」ということに限定させていただき、稿を進めることにしたい。

ファッションは「第二の皮膚 (Second Skin)」と言われるほどに身体に密着しており、肉体的および心理的側面の両者に於いて、個人の快とアイデンティティ形成とに深く関わっている。ファッションとはその意味で極めて主観に富んだ対象物であると言える。

ファッションの調和感を構成する際に重要なものは、デザイン要素以前に、個人あるいは拡大すれば社会にまで広がるような、調和に対する一種の主観性、つまりそれを作り出す、あるいは着用する人や組織の意志・意図が重視される点であろう。

その意志や意図は、よく「個性」と訳される。しかし、個性という、何か異質性を前提としたような語感のものではなく、もっと正確を期すならば、「自身の(あるいは組織の)アイデンティティの確保を目指す心」というべきであろう。

調和—Harmonyは、英英辞典を見ると"A pleasing combination of elements in a whole (American Heritageより)"とあるように、「全体を構成する要素の心地よい組み合わせ」である。

ファッションについても同様に、デザイン要素の検討以前の問題として、表現したい全体構成が調和感の鍵を握っている。そして、この全体性とはファッションの着用者のアイデンティティの確保に他ならない。

そのアイデンティティの確保に向かって、さまざまなデザイン要素を心地よい組み合わせとして創り上げていくこと。これがファッションの調和感となる。

色彩は情動性が強いだけに、それらのデザイン要

素の中で重要なパートの1つではある。が、それ単独ではこの全体性は構築しきれないのである。

### ファッションにおける今日的アイデンティティと色の意味

ファッションにおける色彩調和を考えると、前項で触れた「アイデンティティ」をいかに表現するか、それが調和そのものの根幹を左右することになる。それは表層的に色を組み合わせていくという単純な作業ではなく、「色の持つ今日的な意味」を、ひとつのアイデンティティ構築に向かって組み立てていく作業である。その作業の中では、ある色の意味はアイデンティティ構築という全体構成が持つ文脈によっていかようにでも変質する。分かりやすく言えば、物理的には同じ白でも清楚な白もあれば、卑猥な白もあるのである。

こうした色の持つ意味こそが、調和感の源となる。

人間は優れた感受性を持つもので、ある刺激に対して五感の共感覚を生じる。そうした感覚レベルでの経験をそれに付随する記憶と共に積み重ねることによって、さらに広い意味連合の中で抽象概念から具体物、感覚までもが連なりを持つのである。

意味とは、それらの連なりが編み上げる一種の心理的ネットである。色が与える広範な意味が、ファッションを構築している他の要素の意味、例えば、ファッションの創造者(あるいは着用者)の意志、素材、形、といったデザインの要素、着用者の所作などと整合して初めて我々は心地よさや、よき調和を感じるのである。

こうした現実的な調和を得るためには、色彩は他の多くの構成要素と、意味上での整合性を持つことが調和の基本となる。要は表現される「全体が目指す文脈」に色の意味が沿っていることである。しか

し、調和の構成要素の1つである色が全体の文脈に沿うというのは、極めて素直な調和表現である。

ファッションにおける調和の醍醐味の一つは、その素直さから脱却し、既存概念を破壊し、異なる色の意味を生み出していくことにもある。アヴァンギャルドな表現、ミスマッチの提案などと言われるものがそれにあたる。それらの慣習的でない表現の当初の支持者は少数の変わり者である。しかし、それがやがて一般化することも多々ある。

ファッションにおける調和感は、いかに調和論に沿わないようにするかとでも受け取れるような、一種天の邪鬼な表現視点がある。それが、ファッションの色彩調和を魅力あるものにしていると同時に複雑にもしている。そのような表現が現れる所以は、ファッションという対象物がそれだけ矛盾に満ちた人の内面と直結しているためであろう。

## 意味表現の志向性と色彩

ファッションにおける調和感の発生源が我々のアイディティティの確保にあることを前提とすれば、その最終表現は、人によって当然異なることになる。したがって、ファッションにおける調和は、着用者の数だけ存在するというのが本当のところだろう。ただ、そうやってしまっては稿が継げないので、今日的なファッションの全体構成の現れを、表現の志向という視点から見て、今日支配的な、①安定・安心志向、②健全・健康志向、③機能・効率志向、④破壊・逃避志向、の4カテゴリーを取り上げ、その意味と色彩および調和の特徴を考えてみたい。

### ①安定・安心志向と色彩

安定した日常、落ち着いた心を目指す志向である。いわゆる「癒し」感覚や「リラクゼーション」を求める志向もこのカテゴリーに入る。この志向は、特に1970年代以降顕著になった。その背景には、人間的余裕を欠いた社会状況が強まったところに端を発している。

この志向では、親近性、見慣れ感の表現も重要で、いわゆるレトロスペクティブ（回顧趣味）、伝統（トラディショナル）、古典的（クラシック）など、過去の良き時代を志向するものも含まれよう。色彩調和の前提となるものは以下のような、いくつかのモチーフに依るものとなる。

#### （1）自然素材

筆者らが行った色のイメージ調査では、安定・落ち着きを意味する色領域は、中間色、濁色、暗色となり、特に茶系にこの意味合いが強く抱かれている。

実際のファッションに於いても、ベージュ系からオーカーを経てダークブラウンに至る色域が中心となる。これらの色域は、未漂白の自然繊維や皮革・毛皮、木材、土の色などの自然素材色に顕著な色域である。

色の意味は、我々が見てきた事物に大きな影響を受けることは当然だが、これらの自然素材色は長い年月の中で前記のような経年変化をたどるものが多く、その記憶が色の意味に直結しているものと思われる。

表層的な色彩の表現形式では、同系色相による濃淡配色が主体になる。また、自然感を表現する上で、色相の自然連鎖を守った配色形式も重視される。

#### （2）レトロスペクティブ

ファッションに於いては、レトロ志向は頻繁に現れるモチーフの一つであるが、その本質は、過去の良き時代の持つ安心感や精神的な安堵感にある。この志向における色彩は時代の拠り所により一定ではないが、近年では、1950年代～1970年代がよく使われる。ただし、これらは色彩のみでは表現しきれず、主に柄や形態と一体となって初めて成立するものである。

柄との関連で言えば、1950年代調では、水玉、小花柄、曲線的抽象柄を主に低彩度明色で使うものなどが、1960年代では、ポップアートや抽象的幾何柄を用い、白黒使いや原色調のオレンジ、ライムグリーン、イエローなどの高彩度色が、1970年代調では、チェックや草木柄を用い、主に茶系や緑系による色相統一型の柄使いが主体となる。

古さを表現する手法として、使い古した退色感、洗い落としたイメージなどが必要になることも多い。また、モチーフにより色相は一定ではないので、使用される色域としては、高明中彩度色、中明低彩度色が主体となる。

配色の形式は、色調統一型が一般的である。

#### （3）伝統・古典志向

この志向は、ファッションにありがちな変化を志向するものではなく、むしろ変わらないことが重要な志向である。いわゆる人生儀礼、儀式の中で使用される色彩が多用される。また、特に紳士衣料では、正統とされる英国伝統色も重要な色彩である。色彩

の意味内容としては、むしろ個性を積極的に失い、匿名性の中に埋没し、他との協調性を得ることによって、自己を安定させるものと言える。色としては、濃紺、黒、灰色、ベージュ、赤、白が代表格であるが、洋装伝統色としてはさらにダークグリーン、ブラウン、ゴールド、ワインが挙げられる。

## ②健全・健康志向

この志向は、社会状況が逆に不健全になり、その不健全感を払拭したいとする意識から生まれた志向である。1980年代の初期～中期に台頭し、現在でも重要な志向である。

健全・健康感とは、精神的なものと、肉体的なものに分けられる。

### (1) 精神的な健全・健康感

精神の健全性を表現する志向で、清浄性、純粋性、慈愛、積極性などを象徴する色群が多用される。色域では、白、高明度色、高彩度色が主体で、いわゆる清色系による調和形式が一般的である。

### (2) 肉体的な健全・健康感

肉体的な健康感を強調する色域および配色形式としては、高明度色、高彩度色による配色、また、単色の動感を強める意図で、白および黒と前記の色域を使った明度対比、彩度対比の形式が多用される。

精神、肉体のいずれにしても、健全感とは、暗さよりも明るさを、汚濁感よりも清澄感を持つ色域が主体となる。

## ③機能・効率志向

肉体的な動き易さ、衣服としての使い回しの良さ(コーディネートの容易さや、場面を選ばないこと)を追求する志向である。

肉体の動きに追従するという点では、色彩よりもむしろ、スタイリングと素材によるところが大きい。

色としては、TPOを選ばない色として、いわゆる無難な色と言われる、灰色、紺色、白、黒、ベージュなどがこの種のカテゴリーに多く使用されている。

無駄を省くという視点からも、多色使いは行わず、単品内では単色使いが主体となる。

## ④破壊・逃避志向

社会体制への反発・抵抗、あるいは、現実からの逃避・非日常性を志向するカテゴリーである。前者は社会的なアイデンティティが確立されていないと感じる若年層に顕著で、いわゆるパンクファッション

ンがこれにあたる。

他者への威嚇、暴力的メッセージに溢れたデザイン処理がなされるが、色としてこの文脈に沿うものとしては、黒と赤、および武器を連想させるシルバー等の金属色が挙げられる。

一方、逃避志向の現れとしては、刹那志向、異国志向、退行志向が挙げられる。具体的な表現としては、超セクシールック、エスニックルック、チャイルドルックなどとして現れる。

セクシールックという文脈では、透け感を持つ黒および白、紫および紫みを帯びた赤系の明色から農色が代表的な色域となる。また、セクシーさの表現という点で、素材感や柄使いに、しなやかで透ける素材、曲線的フォルムが多用されることは容易に想像がつくだろう。

エスニックルックという文脈では、エスニックの源となる異教徒性をインド、東南アジア、中央アジア、日本、中国、中近東、アフリカ、中南米など、どの文化圏に採るかで色は一定ではないが、一般的には、自然染料による見栄え、素朴性を狙ったものとして、中明中彩度を主体とした色調支配型の配色形式が採られる場合が多い。また、アジア文化圏を対象としたものでは、その文化圏の色使いに中差色相の配色が多いため、中差色相使いのデザインも多用される。

また、素朴さの表現という意味で、素材感に目の粗い短繊維系素材を使ったものが多くなる。

チャイルドルックという文脈では、いわゆるガーリッシュ(girlish)調、ロリコン調などと言われるものとなる。幼さ、可愛らしさ、無垢なイメージを表現する上で、明清色系列の色が主体となる。

## 色の調和は意味の調和である

ファッションの色使いを分析し、その中から色彩調和論の多くが提唱する「統一の要素と変化の要素とのバランス感覚」、「色空間内での色の幾何学的位置関係」、「色相互の視覚的な安定性」、「色の見慣れによる親近性」、「色相や色調による統一性」などを抽出することはたやすい。その意味では、ファッションの色彩調和の形式は、一部のアヴァンギャルドな表現を除けば、先達の色彩調和論から大きく逸脱するものではない。

しかし、だからといって、色彩調和の原則を守れば、調和が得られるというわけではない。というの

は、ファッションを構築する際に重要に視点は、色彩以前の全体性の構築であり、色はその全体性が表出しようとする意味を補強・補完する媒体であるからだ。

全体性に整合する色の持つ意味を考えない調和はファッションにおいては「仏作って魂入れず」のよ

うなものである。それは主観性のないつまらないものや、TPOに沿わない突飛なものになってしまう。

ファッションに於いての色彩調和は、色そのものよりも、色の裏にある意味を全体性に沿っていかによりコントロールするかにある。そこにこそファッションの色彩調和の本質が宿っている。

### 1. 安定・安心志向に見られる色彩例

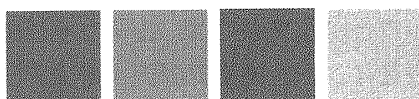
#### (1) 自然素材志向と色彩



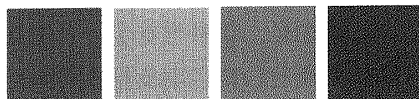
DKNY 2001AW NY

#### (2) レトロ志向と色彩

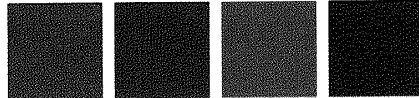
##### 1950年代調



##### 1960年代調



##### 1970年代調



Hourglass  
2001AW NY

#### (3) 伝統志向



NY Based  
2001AW NY

### 2. 健全・健康志向

#### (1) 精神的健全感



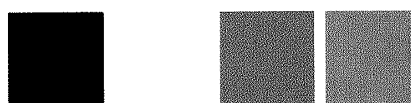
Cynthia Rowley  
2001AW NY

#### (2) 肉体的健全感



Custo Barcelona  
2001SS NY

### 3. 機能・効率志向



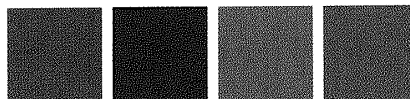
Narciso Rodriguez  
2001AW NY

### 4. 破壊・逃避志向

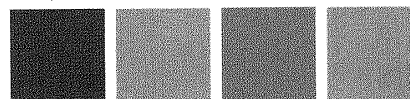
#### パンクファッションの色彩例



#### 民族調の色彩例



#### セクシールックの色彩例



Calvin Klein Collection  
2001SS NY

写真提供 株式会社ファッションブレン